

OB・OGの職場探訪

文藝春秋社

池内真由

さん(2009年法学部卒)

「今日はよろしくお願いします」。東京・紀

尾井町の文藝春秋本社を訪ねた記者を池内真由さん(2009年法学部卒。私立横浜雙葉高校出身)

は、快活な声で出迎えてくれた。「Hakunonちゅうおう」学生記者のOGでもある池内さんは、記者の先輩になるが、お会いするのは初めて。明るい笑顔に迎えられ、緊張の糸がほぐれた。

「週刊文春」記者3年目
スクラップで資料整理

早速、案内されたのは、池内さんの仕事場である「週刊文春」編集部。その日は休日(水曜日)

の夜とあって室内は静かだったが、それでも数人の方が休日返上で仕事をされていた。部屋の片隅の壁面やロッカーには1週前に発行した「週刊文春」の中吊り広告がべたと貼られ、そのうえ

から「完売御礼」の張り紙。6年半連続で総合週刊誌の部数第1位の座をキープしている編集部の張りつめた空気が伝わってくる。

編集長のデスクからすぐ近くにあるのが、入社3年目の池内さんの仕事机。机上に電話とPC、棚には資料が入った大封筒や「新聞、雑誌などからスクラップしている」というファイルが並ぶ。

編集部近くの会議室で池内さんに話をうかがうことになった。池内さんは「いつも取材しているのに、取材されるのははじめて」と言いながら、記者の質問にひとつひとつにこやかに受け答えしてくれた。

泣いた初の事件取材
嫌われる週刊誌記者

週刊文春には、エッセイなど連載記事を担当す

る班と事件記事などを書く特集班、それにグラビアページをつくるグラビア班があり、池内さんが所属するのは特集班。そこで初めて事件取材を書いたのが、小中学生連続レイプ事件だった。入社2年目で、先輩記者から「ある団地に被害者が住んでいることは分かっているので、話を聞いてこい」と言われ、その団地に一人で出かけた。

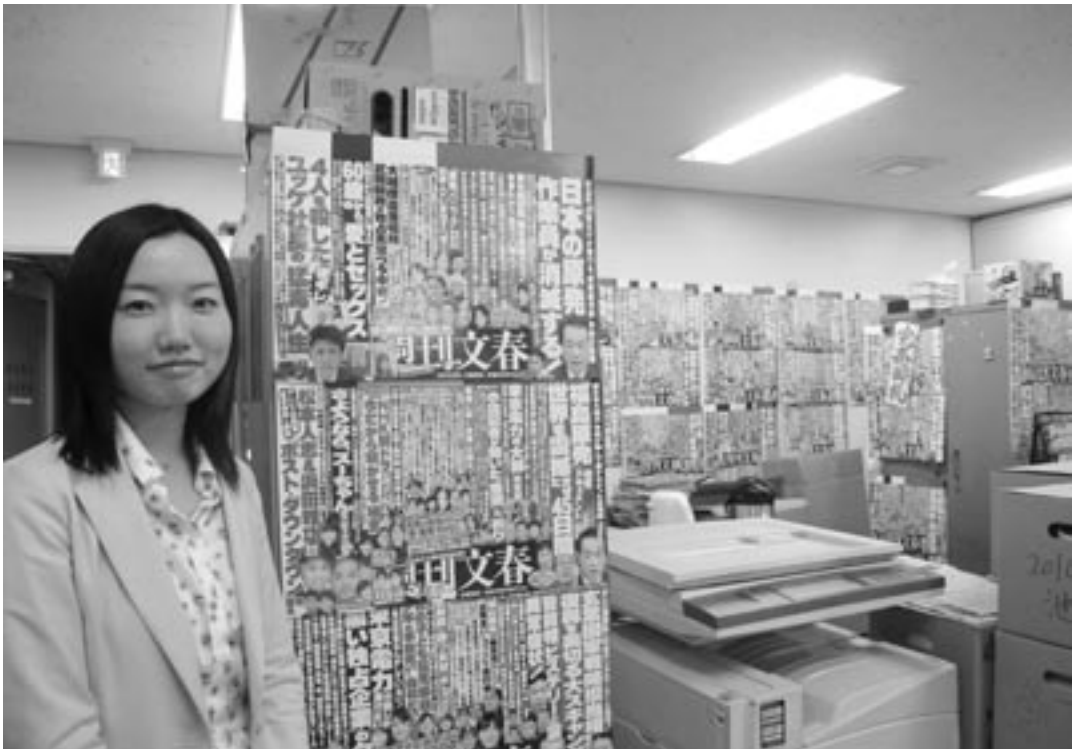
だが、その団地は20棟以上もあり、どの棟に被害者が住んでいるかは分からない。一棟一棟、1階から3階まで隅から隅まで、一軒ずつつぶすように訪ね歩いた。

「レイプ事件の場合、被害者はもちろん、被害者の保護者や友人は『話も聞きたくない』と思うと思います。とくに週刊誌は、テレビ局や新聞記者が取材した後に取材に行くわけですから、一番嫌われてしまうんです」

それでも池内さんは、「仕事だから、なんとか関係者に話を聞かなければいけない」と一日中団地内を探し回った。しかし、心身ともにしんどくなって、気付いたら、近くの美容院のおばさんに泣きながら愚痴をこぼしていた。

マニュアルのない記者の仕事
モットーは「誠意を尽くす」

ところが、偶然にもそのおばさんが被害者の住



壁やロッカーには中刷り広告が貼られ、「完売御礼」の張り紙も

んでいる場所を知っていた。ようやく被害者の一人から話を聞けることになったが、「いざ被害者本人から話を聞けるとなると、すごく気構えてしまった」と当時を振り返る。

「被害者の家を探している時も、インターホンを押しながら『見つかってほしい。見つかってほしくない』という気持ちが混在していたんです。もし被害者

の方と直接お話しするとしたら、私は何て言葉を掛ければいいのか、思い浮かばなかった」と正直に心情を吐露する。ただ、教えてもらった被害者の家を訪問した時、被害者はたまたま留守で、「他の方からお話を伺ったんですが、正直、ホッとしました」と笑う。

「記者生活2年間で、一番印象的だった取材です」

と当時を思い起こしながら、池内さんは、記者の仕事は「ひたすら誠意を尽くすことです」と強調した。

「記者の仕事にマニュアルは存在しません。話を聞き出すために、どうしたらいいかについても、これが正解というのはありません。ですから、私は事前に手紙を書いたり、身元を知らせたり、場合によってはごあいさつ代りに品物を持っていったりします。とにかく、誠意を伝えられるように努めています」

入社早々から現場取材 週に5本の企画を提案

週刊文春は「現場主義」を強みにしているという。現場に足を運び、直接当事者から話を聞き、スクープするというわけだ。新入社員の研修期間は2週間と、他社に比べずっと短く、すぐに現場に放り出される。入社1年目の新人記者でも記事を書く。「取材は先輩記者のサポートを得て行いますが、原稿は基本的に自分ひとりで仕上げます。最初のころは集めたデータの前後関係がうまく繋がらず、悪戦苦闘しました」。そうやって必死になって仕上げた原稿も、新人時代は「真っ赤っかに修正されて返却されるのがザラ」だった。

自分で考え、学びながら取材と原稿の書き方を

習得していった池内さんは、入社1年目の終わりごろから、先輩に付かず独立して仕事をやるようになった。入社2年目の5月には後輩を育てる

よう指示された。今は、読者に関心と人気の高いジャンルを任せられるようになった。

「毎週新しい企画を5本考えて、編集長に提出



PCに向かう池内さん。資料は大封筒やファイルで整理されている

することにあって、人に会ってネタを仕入れ、散歩していても面白いものはないか、と探しているんです」というから、寝ているとき以外は、仕事から離れられそうにない。「新聞やテレビは生の情報を伝え、週刊誌はそれを深く掘り下げて、読者に伝えます。新聞、テレビが刺身なら、週刊誌は干物。だから企画力が勝負なんです」。

鍛えられたFLP松野ゼミ 刺激受けた大学時代の出会い

池内さんは、文章を書くのが好きで、大学入学前からマスコミに興味があったという。大学時代はFLPジャーナリズムプログラムの松野良一ゼミに所属し、地元ケーブルテレビで放送される地域情報番組を制作。また「Hakumonちゅうおう」学生記者としても活躍した。

「番組制作は企画・取材・編集の流れを組むのですが、そこで学んだことが今の仕事の役にたっています。松野先生のモットーは『仁義と手順を守れ』で、このふたつがしっかりしていれば何があっても大丈夫だ、とおっしゃっていました。最近になってようやく、なるほどと思えるようになりましたね」

大学時代の取材先での数々の出会いを通して池内さんは、学内では得られない刺激を受けた。

「もっとも印象的だった」というのは、「130年の歴史を誇る酒蔵」というテーマで制作・放送した番組で、「歴史ある酒蔵の最期の時をこの目で見ることになって、映像として残せられたのは貴重だったと思います。その社長さんとは今でも仲良くさせていただいているんですよ」と嬉しそうに語る。

池内さんは大学時代から記者活動をしてきたが、社会に出てプロの記者になって、学生時代との違いはどこにあるのか気になって、尋ねてみた。

「学生時代の取材の場合、大抵相手の方は喜んでくれます。断られることなくあります。ですが、本当の取材はそうはいきません。たいがい嫌われますからね。取材で訪問した先で怒鳴られたことは何度もありますし、水をかけられたこともあります」。その違いは明確で、プロの記者

の厳しさを教わった。

読者からの反響が励みに 社会に変化もたらす記事を

週刊文春の記者の休日は「週一日」で、その休みの日も「企画を考えるのに使ってしまう」とか。しかも「校了前は徹夜になることが多い」という。そんななかで励みになるのは、読者からの反響だ。「毎週読者から来るアンケートはがきに、自分が書いた記事の感想が書かれていて、それが褒め言葉だったりすると、思わず微笑んでしまいます」。

入社3年目で、池内さんは「私はまだまだひよっこ」というが、週刊文春記者として「読者の中に『何か』が残るような、もっと言えばその『何か』がいろんな人の心に芽生えて社会に変化をもたらすような、そんな記事が書けるようになりたいです」と抱負を語ってくれた。

最後に出版業界を志す学生に、「学生時代にやっておくべきこと」は何なのか質問してみた。「自分の好きなものを大事にして伸ばしていくことだと思います。好きなものがない、という人もいると思うけれど、無理してでもつくれ！と私は言いたいです」。意外にも、池内さんの回答はとてもシンプルだった。

(学生記者 鈴木あきほ 法学部2年)

学生記者になりませんか

「Hakumon ちゅうおう」は中大生が取材・編集する大学広報誌です。

現在、多摩と後楽園キャンパスそれぞれで1、2年生の学生記者を募集しています。

- 元新聞社論説委員のプロや先輩の学生記者に取材方法・原稿の書き方はじめ添削指導を基礎から受けることができます。将来どんなキャリアをめざすにも文章力が重要です!
- 取材を通して、さまざまな人に出会うことができます。
出会いの数ほど思い出ができることでしょう。
- 記者活動を通してコミュニケーション能力など「社会人基礎力」を身につけることができます。

申し込み・問い合わせは

中央大学広報室『Hakumonちゅうおう』
編集担当：伊藤博まで
Phone : 042-674-2048 (直通)
E-mail : hiroito@tamajs.chuo-u.ac.jp

